

「部活」～日本の精神的教育～

土肥野秀尚

日本では、一般的に中学校に進学すると部活に所属する。学生生活の大半を部活に費やす生徒も少なくない。さまざまな部があるが、運動部に入部する人が多い。運動部は、平日はもちろん週末まで部活があり、さらに朝練まである部活もある。そんな厳しい環境の中で、生徒は集団行動を学ぶ。

高校でハンドボール部に所属していたある女子大学生は、部活時代を振り返り、あの頃は先生の怖さに怯えていたと語る。靴やカバンは端に揃えて並べる、先生や先輩に挨拶をきちんとする、練習前と後にはグラウンドに一礼するなど、当たり前ができるようになるまで何度も怒鳴られた。

「先生の厳しさのありがたみを、今身をもって感じている。」

彼女は、厳しいと思っていた先生から、他人への気配りや感謝の気持ちを教わったという。部活動を経験した生徒は、このようにして周囲への気配りや礼儀を学ぶのだろう。

指導に当たる教員は、どのような意識をもって生徒と接しているのだろうか。緑ヶ丘高校元テニス部顧問の久保田俊夫さんは、部活動を、生徒が道徳を身に付け思いやりのある大人になるために必要な教育であると位置づける。

久保田さんは、主に個人競技であるテニス部には、集団行動を苦手とする生徒が多いと感じるという。かつて部長であるにもかかわらず、団体戦を放棄しようとした生徒がいた。彼は、学校とは別にテニススクールにも通っており、自分の技術向上を第一に考えている生徒だった。そんな生徒に対して、久保田さんは「団体戦に出ないなら、部活でテニスする意味がない」と叱り、説得して試合に出場させた。彼に部活で協調性や責任感を学んでほしいと思うからだ。

ある生徒は、入部当初は自ら球拾いをすることもなかった。しかし、久保田さんの指導により、感謝の気持ちや思いやりを示すようになった。その努力が実り、大会に勝ち上がったことで学校の知名度が上がり、頻繁に練習試合を申し込まれるようになった。久保田さんは、その生徒から言われた言葉が忘れられないという。

「これで先生や部活の仲間に恩返しすることができた。」

こういう言葉をもらうときが、久保田さんの苦勞が報われる瞬間だ。厳しく指導するその裏には、生徒に対する先生の思いやりがあるのだ。

編集後記

運動部には怒鳴って指導に当たる先生が多い。当時は、別の方法でも指導できるはずと思っていたが、今になると怒鳴る意味がよくわかる。人は怒鳴られないと変わらないものだ。そして今振り返ってみて思うことは、自分のことしか考えない行動、仲間についての思いやりのなさについてもよく怒られたものだ。先生はこのチームは一生ものだから、大切にしろと言っていた。先生が私たちに気づかせてくれたものは大きかった。(土肥野秀尚)